



王蟲とは何か

昨日の続きで「風の谷のナウシカ」の話。

あの映画の最後の場面、つまり「その者青き衣をまといて金色（こんじき）の野に降り立つべし…」の場面は印象的であり、また感動的でもある。その「黄金の野」が、オームの触手であることはご存じの通り。

そのオームであるが、なかなか不思議な造形がなされている。ダンゴムシやカブトムシの幼虫に似ているというのはよく言われることであるが、宮崎駿さん自身は、セミやトンボやカブトムシやザリガニやクモなどの昆虫や節足動物を混ぜ合わせた姿にした、と発言しているらしい。多くの足をもっていて、怒りに駆られると、ものすごい勢いで突き進む存在でもある。

ところが、このオーム、いったい「口」はどこにあるのだろうか？ もちろんあるのだろうが、それが目立つ形では描かれていない。冒頭の、ユパがオームに追い詰められるシーンでも、ユパが食べられてしまうという感じは受けない。感じられるのは、最後のナウシカのように、はね飛ばされたりする危機感だろうか…。

で、その「口」の代わりとなっているものが、あの黄金の触手なのである。触手は相手に「触れる」ものである。触れることによって、相手を調べたり、情報を伝え合ったり、いやしたりする。それは、「口」のように、相手を飲み込み、咀嚼し、断ち切る器官とは正反対のイメージに彩られている。つまり、オームが「触れる」存在であれば、その「口」

は描かれてはならないのである。

*

ところで、あの最後の触手によって癒される場面は、現代で言えば、総合病院の集中治療室といったイメージだろうか。たくさんのチューブが患者の体に連結し、治療が行われる。あるいは、古いイメージとしては、千手観音といったことも思い浮かべられる。千の手で人々の苦しみを救う姿は、あの触手（＝手）がナウシカを救うイメージの背景をなすのかも知れない。どちらにしろ、あの場面は、「触れ」「包み込む」イメージによって成り立っている。食べて消化してしまう「口」とは反対に、命を生き続けさせるものとしてオームの触手があるのである。

*

そのオームが大地を埋め尽くして進撃してくるとき、女王クシャナは、巨神兵という「火」の力によってそれを鎮めようとして失敗する。一方、ナウシカはオームの中に身を投じる。自己犠牲といった言葉によって形容されることが多い場面だが、大切なことは、ナウシカがオームと「触れた」ことによって進撃が止まったということである。つまり、怒りは怒りによって鎮めることはできず、触れ合うことによってしか鎮めることができない、ということなのである。

オームには口がなく、触れ合う存在として造形された。それは、この大切な最後の場面を描くためだったのである。（参考：村瀬学『宮崎駿の「深み」へ』平凡社新書、2004）